橋本　直樹様

　こんにちは。荻窪のライブでは演奏終了後に程なく酩酊状態となり、その後何日か過ぎたところで今度はぎっくり腰になりました。最近漸く復活したところです。ルースターでは素敵な演奏をありがとう。脳に適度な刺激が入ってボケ防止にも役立ちそうないい感じのサウンドでした^^/

　当日はゆっくりお話しする約束が果たせず大変申し訳なかったです。30 年以上前に頂戴した直筆のお手紙はシンセサイザーのモニター試用をお申し出頂いたものでしたね。ご自身の活動を通じて真剣に評価なさりたい旨が真摯に書かれており、今読み返しても熱い情熱が伝わってくるね。この 30 年間の引越しやら・家の建替やら・今後を見据えた断捨離やらの荒波を超えて、頂戴したお手紙とカセットテープはいまだ自宅に健在です。

　直樹の真剣なご提案に対して何のお返事も出さなかったことについては、君のことを思い出す時にはそこそこ（笑）胸が痛みます。足を向けて寝られないか。。。と考えた時期もあり、横浜方面と正反対の角度で横になってみたりもしましたが、君が埼玉に住んでいないことが担保されておりませんでしたのでこれは中止と致しました。

　頂いた手紙にお返事ができなかったのは、シンプルに君の評価がものすごく”怖かった”からです。

”これ使えないかも。。。”という結論を君流の優しいオブラートでご報告頂くことを鮮明に想像しました。評価者はなんといっても橋本直樹です。既に DX-7 のみならずシーケンサもリズムマシンも駆使していることがお手紙から見て取れました。やくざと目を合わせてしまったサラリーマンか、国税に目をつけられてしまった個人事業主か、まあそんな心境でしたかね。

お手紙を頂くおよそ 3 年前、我々の開発チームはシンセサイザーの業界勢力図を自分たちの手で大きく塗り替えられるものと確信していました。アナログで一世を風靡してきた海外の老舗プランドたち、さらには国内の主力メーカーも全て駆逐できるような業界初のデジタルシンセサイザーを作れるものと信じていたのです。

その理由は、我々の音源 LSI が波形の読み出し位相角を動的に変調して豊富な倍音を作り出す方式を採用していたことでした。私が知る限りこうした方式は Y 社の音源方式も含めて、後にも先にも世界に 3 つ位しか存在しなかったように思います。当時私が最も尊敬する先輩エンジニアが考案したアートでありました。

30 年以上前の当時は、従来型のアナログフィルターを単純にデジタル回路に置き換えようとするアプローチの音源技術が特許提案を通じて数多く世に問われていましたが、回路規模が膨大になるばかりで、出てくる音は原理的にアナログシンセを非連続的に超えられるものではなかったため、商用ベースに乗ることはありませんでした。そもそも技術的な発想に美しさがないので全く怖くはありませんでしたね。また、後々業界の脚光をあびることになった Y 社の音源方式に対しては、若干の脅威は感じていたものの、外野からは実現の具体性に乏しい技術に見えていたことから、我々の方がずっと早く製品にまとめ上げることができるものと甘く捉えていました。

我々の製品出荷がいよいよ 1 年後と迫った頃に、銀座に TOTO が現れました。Y 社製デジタルシンセサイザーの大々的な新製品発表会でした。会場には数十台のシンセが整然と並べられ自由に試奏させてもらうことができました。再現できる倍音の豊かさとタッチレスポンスの感触、それでいて 25 万円を切る価格設定はまさに驚異の脅威でありました。その後の業界での評価と浸透度合いはご存知の通りです。

この怪物電子楽器がマーケットに登場した後、社内では予期せぬ辛い事件が起こりましたが、最終的にはなんとか商品化にこぎつけることができました。ハービーハンコックがその音質を気に入ってくれて名古屋公会堂のライブに半田ごてを持って一人同行したことがありました。ROCKIT BAND の時代でしたが舞台の袖につめてライブを見ることができたのは緊張しつつもいまだに人生最大の経験です。時々視線があったりする超 S 席でした！　帰りの新幹線でも彼の隣に座らせてもらったのですが、“Y 社製に比べると slightly 音が細いかな。。。”とソフトな表情でリアルなコメントを頂戴しました。やはり設計者の見立てとトップユーザのそれは大きくずれてはいなかったということだと思います。

君から拝聴するであろう評価結果は恐らくハービーのそれと似ているであろうと当時確信していました。仮に今の自分がお手紙を頂戴したとすれば、異なる対応を取ったものと思いますが、これだけ時間が経過した中での間延びしたタラレバですね。当時は好ましくない現実を目の当たりにすることを恐れるエンジニアでした。

それでも我々の製品は一定のブランドロイヤリティの獲得に成功し、数年にわたって良好なポジションで競争することができました。その後は PCM 技術の台頭によって顧客が求める製品の姿も大きく変わっていきましたね。

最近では面倒なことを何も考える必要のないアコースティックピアノが最高です。

2018 年 7 月 11 日　堤　研一